

新しいロゴマークについて



この意匠は、広く四葉文（しようもん）と呼ばれ、東洋意匠の一典型の錨（いかり）形の4枚の葉（花柄）を十字形に組み合わせた文様で、柿蒂文（していもん）とも呼ばれます。中国、漢代の鏡や瓦当（がとう）に多くみられ、「葉」というものの、実際は「花」（花柄文）だとされています。長い茎がついていて、それがあたかも水面に咲き出る花を表わし、蓮（はす）あるいは睡蓮（すいれん）の花をイメージするものとされています。

また、中国の神話、伝説においては、この文様は天体を象徴するもので、天の中心にある天極星（北極星）の神、つまり天帝である太一（古代中国における宇宙の根元を表す哲学的概念）を蓮の花によって象徴するものとしています。天は大地の四方の果てにある柱によって支えられ、逆に大地は天に結ばれた4本の維（い＝太い綱）によってぶらさげられていると考えられ、東・西・南・北、四方の星宿の分野ともいえるべき青龍・白虎・朱雀・玄武の四神を表現していたといえます。

一方で、日常にある“気づきの楽しさ”を積み重ねていくことで、新たな興味が湧き、楽しいからより深く知りたくなる。そして、そこから新たな発想が生まれ、また次の気づきを体験する。私たちは、こうした生涯を通じた学びの尊さと、終わりのなき探究の象徴として、簡潔な文様の中にも壮大な宇宙観を内包する四葉文が最もふさわしいと考え、ロゴマークといたしました。